

登呂遺跡の発掘は、戦後の日本に一大考古学ブームをもたらした。それは日本の考古学界・歴史

学界の新しいスタートでもあり、「皇国史観」から脱却する第一歩であった。また、その影響は歴史学にとどまらず、地質学・農政学・人類学・建築学・地理学・植物学などの他の様々な分野にまで及び、学際的研究の始まりでもあった。そのため、〈史料1〉にみられるように大規模な発掘が行われることとなり、専門家以外にも地元の学生や一般市民といった多くの人々が参加したことからもわかるように、日本国中の関心が登呂遺跡に注がれた。

1 戦時中の発見

登呂遺跡はもともと1943（昭和18）年に

登呂遺蹟／きのう鉄入式／二千年前の神秘を探る
昭和十八年、はからずも静岡市石田で発見された「登呂」の遺蹟は、戦争のため忘れられ今日に及んだ。戦後再びその意義が問われ史学界、地質、農政学界が中心となり、郷史研が合して大規模な発掘と精密な調査計画の下に文部省、静岡県、静岡市、各地元青年団、男女中学、師範校参加により、この地域における日本上古（二千年前）の世界に対し学術的、科学的研究が行われるに至った。文化的関心がほうはいととして高まりつつ、ある現代、かかる仕事が真の文化的事業の一つとして学界の波紋はもとより、全国的にその重大な意義は注目されている。

昨日現地において、関係者が参集しこの発掘事業の鉄入式が行われ、考古学界の先輩たる帝国学士院会員の原田淑人氏のあいさつに始まり、国学院教授の大場磐雄氏の事業計画及び意義についての説明があり、知事の鉄入、増田市長の祝辞に終わった。尚、発掘に労力を提供せんと知識欲にもえた若い学徒は大里村青年団、島田青校、静岡師範、浜松二中、静岡古代史研究会学徒等多数がある。（後略）

〔史料1〕（登呂遺跡発掘調査鉄入式挙行）

『静岡新聞』昭22・7・14

〔静岡県史〕資料編21近現代六 901頁

住友軽金属プロペラ製造所静岡製作所と三菱重工業静岡発動機製作所の建設工事中に発見されたもので、その第一報は毎日新聞静岡支局記者森豊により報道されたが、時局柄わずか数行の記事だった。その年の8月に静岡県により緊急に調査が行われた。途中から文部省史蹟調査嘱託上田三平も参加したが、十分な調査が行われな

ままであった。戦争終結後に森豊の再発掘を促す活動により、1943年の調査に参加した地元の安本博や加藤忠雄らが中心となり、地元有志の会を立ち上げると、東京の関係者がこれに呼応したことで登呂遺跡調査委員会が構成され、発掘が行われることとなった。

2 戦後の本格的調査がもたらした意義

登呂遺跡の発掘調査において、特に発掘に参加した旧制中学、新制高校の生徒が積極的な活動をしたことが高く評価さ

すみとも
住友軽金属プロペラ製造所静岡製作所と三菱重工業静岡発動機製作所の建設工事中に発見されたもので、その第一報は毎日新聞静岡支局記者森豊により報道されたが、時局柄わずか数行の記事だった。その年の8月に静岡県により緊急に調査が行われた。途中から文部省史蹟調査嘱託上田三平も参加したが、十分な調査が行われな

〔前略〕
昭和二十三年
四月 部員募集
二十四日広幡村潮 泥炭出土地調査。
二十五日広幡村水守二軒家須恵器出土地を調査する。
二十八日有度山及登呂、有東の遺跡を歴訪する。
岡部町東谷弥生式土器出土地の調査をする。
五月 三十日、明大後藤教授来る。登呂及郷土の遺跡について講演を受く。
又採集遺物について鑑定を受く。
六月 七日榛原郡上長尾遺跡を探訪す。
二十二日、東益津村高崎古墳を調査する。
この頃より七月頃まで広幡村水守、鬼島、潮、八幡、仮宿等一帯の須恵器出土地を調査する。
七月 二十五日より八月三十一日まで登呂遺跡の調査発掘に参加する。
八月 二十五日登呂遺跡調査発掘参加報告会及遺物展示会を開く。
九月 高校昇格記念展示会を開く。
十月 二十三日より十日間、静岡市片山廃寺調査発掘に参加する。この間有度山西麓の縄文遺跡、古墳、人穴、かまあと等を歴訪する。
十二月 増田君、六合村阿知谷より石匙の出土を報ず。
三十一日朝比奈村小丹原を調査する。（後略）

〔史料2〕（志太高等学校郷土研究部経過報告）

（志太高等学校郷土研究部『劔』創刊号）

〔静岡県史〕資料編21近現代六 907頁

れた。〈史料2〉は志太^{しだ}中学、志太高等学校（現藤枝東高等学校）郷土研究部の1948（昭和23）年の活動記録であるが、このような活動が、やがて片山^{かたやま}廃寺跡を発掘する望月^{もちづき}薫^{まさひろ}弘や、のちに浜松市博物館館長となる向坂^{むこうざか}鋼^{こう}二^じなどの研究者を生む土台となったのである。なお、明治大学名誉教授大塚^{おおつか}初^{はつしげ}重も明治大学学生として参加していた一人であった。

〈史料3〉は登呂遺跡の調査を資金面で支援するため企てられた募金活動の趣意書である。終わりの部分に出土遺物の返還と博物館の建設を企画していることが述べられていることがポイントである。また、調査後援会の規則でも、遺跡の保護と顕彰、観光対象の諸施設、博物館の建設を目的に掲げている。戦前までは発掘が行われると、遺物は東京帝国大学や東京の博物館などに持って行かれてしまい、遺跡と切り離されていた。遺跡自体は皇室とのかかわりがあると考えられる古墳などを除いてあまり重要視されていなかった。保護し、顕彰する必要があるものとの認識はあったが、そのような扱いを受けた遺跡はほんのわずかであった。ましてや公園として活用するという考え方は前例がなく、そこに注目したことは画期的であった。登呂遺跡こそ現在

在多くある遺跡公園の発祥なのである。1952年には特別史跡に指定された。また、遺物に関しても、1955年に遺跡内に「静岡考古館」（のちに登呂博物館）が開館して、現地で保管、展示公開が行われたが、これも全国的に先駆けた本格的遺跡博物館となった。このように登呂遺跡は学問の世界だけではなく、社会的にも大きな役割を果たし、戦後の混乱期に国民に希望を与えた意義は、はかりしれないほど大きなものである。

登呂遺跡は、1999（平成11）年から5年間で再発掘調査が行われた。「発掘調査概要報告書」によると、現在登呂公園の西側に保存されている森林跡は、集落が洪水で廃絶した後に繁茂^{はんも}した可能性が高く、登呂遺跡で有名な、畦^{あぜ}を補強する堅固な木杭列も集落廃絶後に打たれたものであり、集落が営まれていた時期の畦は盛土のみの簡単なものであったようである。そのため登呂遺跡のイメージは修正される必要があるが、新たな発見により登呂遺跡の価値は再評価されるべきであろう。

〈参考文献〉

『静岡県史』資料編1 考古一、通史編1 原始古代 第1編第3章第1節、通史編6 近現代二 第3編第3章第4節

〈史料3〉（登呂遺跡調査後援募金運動発起人の委嘱）
文化号外
昭和二十三年五月三十一日

静岡県教育部長 吉田威雄
増田茂殿

登呂遺跡調査後援募金運動発起人委嘱の件
今般、別紙趣意書の通り登呂遺跡調査後援の為募金運動を展開し、日本古代史の科学的闡明に地元静岡県民として能ふ限りの支援を図り、文化国家建設の大業に資し度く存じますので、諸般御多端の折柄御迷惑とは存じますが、本運動の趣旨に御賛同の上まけて本運動の発起人を御引受け願ひ度く、いづれ六月二日係員拝趨詳細御願ひ申上げる予定であります。不取敢右書中を以て御願ひ申し上げる次第です。追て、本運動は近い将来に於て登呂遺跡調査後援会として、遺跡の保存顕彰の面へも恒久的に協力出来得る様態を整へたいと考えて居りますので申添へます。

趣意書

〔中略〕かゝる遺跡の究明こそは文化日本の再建に振立つたわれわれ日本人であらゆる困難を排しても努めなければならぬものであり、殊にわれわれ静岡県人の努めなければならぬものと固く信じているところ。〔中略〕われわれがこれを援助する為には、再び県市の財的援助を得る他に、広く県内有志諸氏の厚意に訴えて後援の万全を尽くしたいと思ひます。あらゆる方面に苦しんでいられることは万々承知してはおりますがどうか皆さんの深き御理解と御援助とをお願い申上げます次第です。なほこの登呂遺跡調査会の学者諸氏の調査が終了しましたらば、発見の遺物を静岡に持帰りをお願いし、それによつて静岡の土地に古代文化博物館を建設し、日本の建國当時の姿を科学的根柢によつて世に明かにし、再建に奮立つわれわれの踏台としたいという念願を持つて居ることを耳に入れておきたいと思ひます。

〔静岡県史〕資料編21 近現代六 904頁